

教育実践の構造論 (続)

加 藤 秀 男

私は島根大学論集(教育学部)第10号において「教育実践の構造論」を「生活指導と教科指導との関係」の視点において考察した。

本論はその続篇をなすもので「生活指導と特別教育活動との関係」を考察し、進んで教育実践の構造を全体的に把握しようとしたものである。

I 主体を軸とする生活指導の三過程

私は前論文で「人間形成の四肢の構造における主体を軸とする生活指導は三つの過程を核として進展する、それは

- a. 恆常的な自己指導の過程
- b. 恆常的な集団づくりの過程
- c. aとbとの過程の中から提起される重要な生活現実の問題の解決過程

であり、この三つが相互媒介的に実現されて主体的自己の生き方の統一、人生観の確立へと向って展開される」のとべた。^①

人間は「世界内存在」であり、世界に包まれ、世界に対して生きていくものである。人間が包まれ、相対して向う世界を私は客観と集団と自己とする。この生活を指導する教育を

- A 自己に包まれ、自己に対して立つ人間の教育
- B 集団に包まれ、集団に対して立つ人間の教育
- C 客観に包まれ、客観に対して立つ人間の教育

とする。

私が生活指導の三過程としてあげたa、b、cはそれぞれA、B、Cに対応し、その日常の実現過程を取扱うものとして構想されていたものである。そして

aは個の reality を直視し、個の根源の声を

きき、より人間的な生き方を探し求めようとする基本姿勢において生活指導の核をなし、bは人間と人間との交わりを深め、結びつきをたかめ、自発的集団的実践的に人間要求を実現していく特別教育活動として組織され

cは生き生きとした現実の直観から、抽象的思考によって客観認識を高めていく教科への発展を予想するものであった。

前論文では生活指導と教科との関係(c-C)を論じたが、本論ではまず生活指導と特別教育活動との関係(b-B)の関係を論じ、進んで生活指導、教科、特活の三者の連関を論じて教育実践の構造を明らかにしたい。

特別教育活動の特質は「児童の自発的・自治的な活動を通し」「所属する集団の運営に積極的に参加し」「実践活動を通して」教育の目標を達成することにある。^②

この特別教育活動が形式化し形骸化しようとしていることについては多くの理由をあげられるが、その根本は民主的社会的理想の低下と指導の形式化にあると考えられる。これを救い、現代の歴史的課題に応える特別教育活動に高めていくためには、生活指導に基づく集団づくりを拡充発展させていくほかはないと考える。^③

II 集団を軸とする教育課程

1. 集団づくりの根本思想

現代教育の課題は歴史的社会的現実即して総合的に把握されねばならない。人類が自然に相対して立ち向い、自然に対する科学と技術を発展させてきた業績はいよいよ進められねばならないが、現代の歴史的課題は人間が人類としていかに平和にかつ豊かに生きるかという問いにこたえることである。教育はこの現代の歴史的課題にこたえて、人間が人間としてともに生

きる論理を明らかにし、人間が人間として共に生きる能力を育成していかなければならない。Edward G. Olsen は「第一次世界戦、共産主義、大不景気、ファシズムそして第二次世界戦という最近30年間の相続いて起ったことが、われわれに他の何ものをも教えなかったとしても『人類として共に生きることを学べ、然らざれば死ぬことを学べ』という現代のもっとも厳しい教育的な命令を血と涙の文字で書き綴ったものであることは確言される」とのべているが、今日、原爆を抱いて相対峙する平和の問題を頂点として、保守と革新の対立、経営者と労働者との対立、そしてその渦中にうごめく人間の独善、反目、虚偽、敵対の問題はいよいよ人間が人間として共に生きる生き方の問題を切実ならしめている。

教育はこの歴史的課題にこたえて、人間が人間として共に生きる人間の真実を実現させるために、現実社会の構造とその発展法則について歴史的科学的認識をたしかにしていくとともに、日常の実践を通して民主的集団をつくり、よき集団の成員となる能力、よき集団の組織者となる能力を身につけさせていかなければならない。この課題にこたえ、集団づくりは人間が人間として共に生きる力を養わせることを目的とし、集団をつくり、集団の質を高めてこれを拡充していく実践過程を通して人間の真実を社会的に実現させていく力を養おうとするものである。

集団づくりの根本思想は人間が真に人間としてその可能性を最高に実現していくためには集団なくしては不可能であることの根本認識に立つものであり、集団を作り集団の質を高めていく実践過程を通してのみ人間性の真実が具体的に実現されるという教育観に立つものである。人間の真実はより多くの人々の意見を出しあい、これを討議していく集団過程をほかにしては現われるところはなく、そしてその真実を実現していくためにはまた集団の力なくしてはなし得ない。人類の歴史的課題の解決に立向う実践の路線はこの集団能力を根底から培い、これを充実拡大していくほかにない。集団をつく

り、集団の目標を立て、集団としてその目標を実現していく集団を軸とする教育過程はこの歴史観と教育観に立つものである。

今日、集団主義教育はいろいろな思想的立場から論ぜられているが、矢川徳光氏は「こんにち集団主義といわれるばあいの集団とは、とりわけ現代的な意義をもっている。それは抑圧の秩序に抵抗せんとする意志を一つにしている団結体である。その原型は『万国の労働者、団結せよ、』という呼びかけのなかにある。教育における集団主義はこの呼びかけの精神と切りはなすことはできない。この団結という精神——それが勤労大衆の新らしい秩序の中軸である。そのような秩序に貫かれた集団主義を学校の教職員の中に、また児童生徒たちのなかに育成していくことが現代の学校生活におけるモラルの基本的な課題の一つである」とのべている。吉岡時男氏らはその集団主義研究会において「人間像についての反省が深まり『抵抗力を持った子』『社会矛盾に対処する子』『権力に対決できる子』を育てるのに今までの方法理論でよいか」という発想をしている。

これは集団教育の出立において、集団教育をあまりに特定の思想傾向をもって限定し、その課題と実践活動とをあまりに限定しすぎるものであると考える。今日、大人たちが直面している社会の危機的対立へのとりくみはなによりも大人自身の課題である。子どもたちは動く社会の客観的科学的認識を怠らないとともに、現実の実践過程としての集団づくりのなかで、自分たちが直面する課題に対して誠実にとりくみ、そこから民主的集団の理想をつかみ出し、民主的に生きる基本的な原理を根底から把握していくことをねらわなければならないと考える。

2. 集団組織の原理

ただの友だちどうしのような個人対個人の関係以上に集団を形成しているという意識があるところに集団がある。

そこには身近かな人間的接触を保ちながら作られている集団、すなわち接触集団があり、日常的接触を越えた見わたせない大きな組織的結合としての集団もある。ここに示された人間関

係の接触性と組織性は相互にかみあって現実の集団を形成している。身近かな小集団は接触性を主要な結合原理としながらも、ゆるやかな組織性をもち、大集団はきびしい組織性によつて統制されながらも幾分の人間的接触性をたたえていなければならない。

(1) 接触性の原理

学級を質の高い学習集団につくりあげていく学級づくりの過程で、学級内に小集団を作っていく営みは漸次一般化してきている。

学級内になぜ小集団を作るようになったのか。それについて

① 多人数学級では場面圧力が大きすぎて自由な話しあいができにくい。自由な、なまなまの話しあいをしていくためには小集団をつくる必要がある。

② 多人数学級では子どもたち相互の Communication が稀薄になり深い交わりができにくい。小集団を作って身近かな接触により、衝突と助けあいを濃密にして人間関係を深める必要がある。

③ 子どもたちのなかには自然発生的に諸 group をつくるが仲間はすれもできる。これらを調整して教育的な小集団を作る必要がある。

④ 多人数学級を統制運営していくことは子どもの能力を超える。子どもの能力に応じた小集団を作り自主的自治的に集団を運営させ集団能力を育てる必要がある。

⑤ 学級の仕事を分担させるために小集団を作る必要がある。

などがあげられる。

小集団の特質は身近かな接触集団たるところにある。お互がその呼吸を感じあい、体臭をかきあい、顔と顔とをあわせて喜びや悲しみを語りあう接触性をその特質とする。小集団は小さな集団としての枠とある程度の持久性を与えられた集団である。その中に接触の濃縮が生れる。子どもたちに group の枠が与えられなかったら断片的・一時的な人間のかかわりに終るものが、group の枠が与えられ、group の質を高めることを学級集団から要求されるが故に濃縮し

た人間関係の掘りさがが可能になる。ここで人間理解が深められ、誰もが人間であることを認めあい、仲間意識を高めていく。小集団は人間と人間とがちかぢかの交わりを深めていくことを特質とし、それは Primitive humanity の温床である。

(イ) まじわりのあたたかさを感じあう

自然発生的集団は自己の全心を浮かした集団であり、いささかの警戒心も感じない集団である。学級につくられる教育集団としての小集団は必ずしもこの自然発生的集団に基礎をおかない。むしろ誰とでも結びあいできる社会性を啓培しようとするもので好きな者どうしの集まりではない。だから小集団はその成立のはじめから、いこいとやすらいの集団ではない。しかし小集団はその集団的成熟とともに安堵とやすらいの集団となる。「group の人と一しょにいる時が一番の楽しみです」という集団的安堵感、集団的安定感が小集団で与えられる。それは身近かな自己をかくさない人間的接触によって理解と信頼をまし、「group の人にだけはわかってもらえる」「助けになってくれる人は group の人である」という意識が生れるからである。人間関係のあたたかさは「なれあい」や沈滞ではない。真の親しさからこそ、ともに生きる喜びが生れ、真のあたたかさに支えられてこそ言いくいこともいえるのである。人間関係の親しさ、あたたかさから生れる人間の真実があることを認めなければならない。

(ロ) 人間理解を深める

身近かで呼吸を感じあい、喜怒哀楽を目撃し、心おきなく自己を開いて語りあう関係においてこそ人間理解を深めあうことができる。「あなたはわざと反抗している。内心は淋しいのだ」「筋の通らない反抗、あなたは甘えたいのだ」といった鋭い人間の洞察ができるのは人間の real な凝視によって可能にされるのである。

(ハ) 人間の性格を改造する

身近かな接触は人間のもつものをむき出しに激突させる。子どもたちは group のはだのあわなない人間関係からとび出そうとして group をかわりたいといい出す。しかし他にかわる group

が与えられない時、その group の粹の故に、その group の中で肌を合わせるとは何かを考へてまねばならなくなる。非社会的な陰うつな性格をもつ生徒が group の中で、group 要求にもとづいて、group の支持と刺戟で明るさを身につけていくには数月を要したが、^⑧個人の性格改造は接触集団の中で絶えざる刺戟を受けて持続的な自己改造の努力をつみ重ねていくよりほかはない。

(2) 組織性の原理

小人数の集団では、人間と人間との直接の接触のなかでおのずから秩序が保たれていくが、大人数の集まりとなれば接触による結合力は不安定となる。そこに集りの秩序が要請され、それが集団となるための組織が意識的に要請される。集団が明瞭な目的をもち、特定の組織を通じて成員の力を統制的に発現させようとする統一体となった時に、それを組織集団ということが出来る。組織集団が正しく組織性を実現していくためには、集団目的への自覚と人間関係を律する正しい組織原理への自覚とそれを現実に具体化していく規律とを必要とする。

① 集団目的の自覚

集団が集団としての自己を現わしてくる場合は、集団内の混乱、衝突、矛盾を切りぬけようとして集団の正しいあり方を探究しようとする場合と、外的な問題に直面して集団の力をもってその解決をはかろうとする場合とがある。後者は例えば学力の増進の問題を解決するために、集団の力すなわち集団の認識力、集団の構想力、集団の実践力を活用しようとするようなものである。これは集団の事業目的といえる。集団はしかし、この事業目的を正しく実現するためにも、それを超えて集団それ自体の人間目的を明らかに自覚しなければならない。集団は次の人間の基本要求を実現することを本質的目的としなければならない。

a. ひとりひとりがかけがえない人間として大切にされる集団であること。すなわち、ひとりひとりの人間としての願いが尊重され、人間としての可能性が最大に実現されていく集団であること。

b. ひとりひとりの人間の発展が同時にすべての人間の発展となるような体制を実現していく社会集団であること。いわゆる「各人の自由なる発展が、万人の自由なる発展の条件となるごとき社会」であること。

② 組織の原理

各人の人間としての可能性を最大に実現させていく集団はその人間関係を規律する原理として

- a. 自由の原理
- b. 平等の原理
- c. 協力の原理

を体制化していくものでなければならない。

③ 体制と規律

集団がその目的を実現するために現実に動くためには動く体制が確立されねばならない。体制は集団諸機関の権限と連関の体系である。この体制のなかで集団の意志が決定され集団の活動が展開される。この活動は自由、平等、協力の原理を現実的に具体化した一定の形式に従わねばならない。それが集団の行動規律である。

集団の規律は集団として共に生きる人間の客観的意味を具体化したものであるから、そうした意味で規範性をもち、これを犯すものは集団からきびしく非難される。この規律が member によって自覚化され、集団の活動が調和と rhythm をもって動くとき、そこに集団の美があり、簡潔な style が実現される。^⑨

(3) 学級集団の二重構造

私は教育集団は接触性の原理と組織性の原理をかみあわせて構成されなければならないと考える。こんにちの学校行政においては、新しい教育集団の構想を立てることを困難にしているから、学級集団をこの原理によってつくりあげていく工夫をするほかはない。学級が小人数であれば、接触性の原理と組織性の原理を一体的にかみあわせてその集団の質を高めていくことができる。大人数学級は当然組織性が重視されるが、そこでは相互の Communication が稀薄になり、相互理解が深まらず、集団としての質の高まりを阻害することも多い。このために学級集団内に相互 Communication が濃密に行

われる接触集団としての小集団を作る必要がある。学級集団はこの接触集団を含んだ組織集団として二重構造において組織される必要がある。

(a) 学級→小集団→学級……吸いあげ・更新過程

学級集団の組織性格はともすれば形式的規律と抽象的論議に走ろうとする傾向がある。論議をつねに小集団におろし、人間接触の泉にふれ、そのみずみずしい現実性と内発的な多様性と豊富性を吸いあげ、これを組織化していかなねばならない。

(b) 学級→小集団……要求・深化過程

小集団の特質は人間と人間との接触的な交わりであり、もっとも内面的な深みにおいて人間を結びつける可能性をもつが、しかしただ人間の接触が与えられただけで人間の深みにおける結合が可能にされるのではない。人間関係の深さを求める学級集団の要求が強く小集団に投げかけられるとき、はじめて小集団は凝集力を高め、濃密な人間関係を深化させていく。

(c) 小集団→学級……内発・組織過程

小集団は外からの集団勢力によってもろくも引き裂かれるおそれが大きい。人間の集団能力を強めるためには、接触集団のなかに内発する集団要求を拡充発展させ、合理的理性的な集団討議できたえ、組織集団へと発展させていかなねばならない。

(4) 学級と学校

学校は全集団としての組織性を高く実現している。それは直接、個々の子どもに働きかけるのではなく学級集団を通して働きかける。マカレンコは「私は経験をつみ実践によって次第に確認された深い解釈にたどりつきました。それは全集団がそのまま個人に移りかわるというようなことではなく、教育的な目的で組織された第一次集団を通してはじめて個人も変っていただけるのだということです」と^⑧いっている。マカレンコの第一次集団は直ちにわが国の学級集団にあたるのではない。しかしその本質において、学級集団がより質の高い接触性と組織性をもった集団として成熟する時、マカレンコのいう第

一次集団的性格をより多く持つことができる。マカレンコは更に「集団教育は第一次集団を通じてだけの教育に終らぬようにせねばなりません。子どもたちが日常生活の友情で結ばれ、一日中顔をあわせている集団ですと、そこに家庭的雰囲気が出て、そのために完全にソヴェト的教育とはいえないような教育におちいりがちです。ただのつきあいを通じてではなく、集団的利益が大きくあらわれる集団を通じて、またより深い社会的化合によってはじめて広い政治的教養への移行が可能になります」とのべている。子どもたちはその集団能力の^⑨発展に応じて、学級集団を超えて他の学級集団に働きかけ、更に学校集団づくりへに進展していかなねばならない。

3. 集団深化の原理

人間存在の四肢的構造に即して具体的な集団づくり過程を構造的に深化させることができる。すなわち、接触集団においては、その具体的統一活動を

- (1) 自己を軸とする主体への深まり
- (2) 他を軸とする他なる主体への深まり
- (3) 自他の交渉連関の深まり
- (4) 自他の根源を支える否定的創造性

の四肢構造で深め

組織集団における具体的統一活動を

- (1) 自己を軸とする集団的自覚
- (2) 集団を軸とする集団分析
- (3) 個と集団、集団と集団との組織的発展
- (4) 集団の根源を支える否定的創造性

の四肢構造に即して深化させることができる。

接触集団では次の視点があげられる。

- (1) 自己を軸とする主体的深化過程

自己の reality をいつわらず、はじらわす追求していく。ひとりよがり、虚勢、誇示、卑屈、かげ口、虚偽、失望、虚脱、それらのものが何であるのか。それらの現象的自己の根底に動くものが何であるのか。それをギリギリに追いつめて、人間であることへの願い、他なくしては生きられない人間であることへの根本的自覚を呼び起していく。

- (2) 他を軸とする他なる主体への深化過程

他は厳然たる他者的存在であり、他なる主体的存在である。他を軸として他の心根を誠実をこめてきくという営みが行われねばならない。そして、

(a) 他を独立の生命と意志とをもち、独自の願いをもち、みずからの生涯をとげていこうと願っているいのちとしてみること。

(b) いろいろな生活環境の重圧の中で人間は悲しみ、迷い、歎きの谷をさまよう存在であること、この故に人間に反撥しながらも、より強く人間への結びつきを願おうとする存在であることをつかまねばならない。

(3) 自他の交渉連関の深化過程

(a) 愛による人間結合

人間が人間という重さにおいて、人間としての本質を実現していく力は何であろうか。人間を勇気づけ、人間が人間らしさを実現する力は何であろうか。それは人間への愛である。われわれは人間への愛を感じ、人間への愛を実現した時、もっとも人間らしさを感じる。人間はひとりのいのちをもちながら、他とのかかわりにおいて生きねばならない。そこに人間の実存的矛盾があり、この実存的二分性が人間の悲劇的運命^⑤の口を開いている。まさにこの故にそれをのりこえた愛の結びつきに人間の生きがいを感じるのである。人間を勇気づけ人間らしさを実現していく道はこの人間の間分裂的矛盾を克服する愛として実現されるのである。それはもとより未分化的な愛ではない。自他の距離を自覚し、限りなくその距離をちぢめようとしてちぢめ得ない個性的な深みの故に、限りなく結びつきを深めていこうとする愛であり、この愛の過程のなかに人間性の実現がある。

(b) 告白による人間結合

自他の個性的な深みを深めることによって、その深みにおいて結びつくという人間のかかわりは、限りなく自己の真実を他の中に出していくことでなければならない。それはどれだけ裸身の自己を語りうるかにかかっている。裸身の自己を語る告白は神の前にのみなし得ることであろう。人間が神を発見するもっとも深い契機はここにあるのであろう。神の世界にのみあり

うる告白を人間の世界に求めることは誤りであろう。しかし、これをまち望むことは神への冒瀆であり、教育の傲慢であろうか。人間がその本質において結びあうことは告白において結びあうことである。そしてそれは、一対一、密室の中でしか語り得ないものであるかもしれないがこのことを少しでも広く実現していこうとするところに接触集団の特質がある。

告白が告白をよぶ。告白はみずからを裁きの庭に立たせることであり、このきびしい魂の姿勢に立向うものは、またまさにみずからの真実の告白でなければならない。道元はいう「同事というは不違なり、自にも不違なり、他にも不違なり」^⑥「同事は薩唾の行願なり。ただまさにやわらかなる容顔をもて一切に向うべし」と。

(c) 人間的真実の交流発展

この世においてもっとも真実なるものは、親と子の向いのなかに発現する。これは Group の話しあいの原型である。

(4) 接触集団の無限創造性

自他の接触対面の場は限りなく創造の淵である。いくつかの生命の渦巻きの底から、限りなく新たなものがたちのぼってくる。それはひとたび立てられた集団の秩序を破って新たな形をとろうとする。作りつつ破り、破りつつ作る、そこに集団づくりの限りなく進展がある。

組織集団の深化については次の観点があげられる。

(1) 自己を軸とする集団的自覚の深化

自己の真実の要求が集団の中で生かされているのか、集団の一員として自己は何をしているのかという切りこみかたである。

(2) 集団を軸とする集団分析の深化

集団の活動状況を全体分節的に把握し、その矛盾停滞を客観的に分析していく力を養わねばならない。

(a) 集団の活動内容分析

集団は何を共通課題として進んでいるのか。集団としてとり組んでいる仕事は、みんなを動的に統一していく魅力ある仕事であるのか。集団としてとりくむべきより重要な課題は何であるか。

Ⅲ 教育実践における三つの軸

私は教育の実践構造の軸として三つを立てる。

- 1 は客観を軸とする教育過程
- 2 は集団を軸にする教育過程
- 3 は主体を軸とする教育過程

1. 主体を軸とする教育過程

(1) 主体の自己深化過程

人間は自己自身に対して立つ存在である。自己の reality を見つめ、いつわりのない自己に対面し、自己の真実の願いを掘り起し自己に甘えず、きびしく自己の真実を生かしきろうとする。それはより人間的なものを求めて歩みつづける人間の運命である。日常の自己、集団の中の自己、教科学習における自己が絶えず問われ、そこにうごめき、そこに怒り、そこに歎き、そこに思いわずらう自己を抱いて、そこから人間の本当の声をしぼり出そうとする営み、——人間の本来の声はここからのみしぼり出される——そして、一切の非人間的なものを、人間の名において打ちくだき、人間の真実においてこれを克服していこうとする日々の営み、問題に対して『主体的にどう構えるか』を考える教育、そこに主体を軸とする生活指導の核心的意義がある。

(2) 集団を通しての主体の深化過程

主体化は主体を軸として、主体への限りない内的な深まりにおいて『主体的にどう構えるか』を考える過程であるが、それはしばしば独断におちいたり、自己満足による停滞をきたすことがある。独断の迷夢をさまし、沈滞をゆさぶり、主体的な構えをたしかにしていくものは集団化と科学化である。集団の中に自己を投げ出し、集団の中でもまれ、集団をくぐり、集団の力を吸いこんで立ち上るところに主体的決断の強さと深さが実現される。どのように自己を集団の中に投げ出していか、そしてどのように集団の中で救われ、高められていかを、主体を軸とする深まりにおいて把握させる日常的な営みが生活指導であり、この基底に立って集団生活を組織的に展開するところに特別教育活動

がある。

(3) 客観認識を通しての主体の深化過程

主体的に生きるということは、主体をとりまく環境の中に埋没し、環境の暴威に右往左往することではなく、環境を正しく認識し統制していく力をもって生きることである。客観認識への道はこの主体の要求に支えられて限りなく発展をとげることができ、そして主体は、自然や社会の客観的科学的認識を高めてこそ自己の生存の意義を正しく位置づけることができる。主体を軸として客観認識に進み、客観の認識を通して主体の生活を高めるところに主体を軸として動く生活指導があり、これに支えられて客観認識の本質過程をふむところに教科の特質がある。

2. 集団を軸とする教育過程

(1) 集団の自己深化過程

人間性を豊かに実現させるよい集団そのものが、それ自体の価値あるものとして望まれる。そしてその集団を軸として活動を展開し、みんなの願いを結合させて、正しい集団目標を選び出し、全集団の力を結集してその目標をなしとげようとする。しかしそこには、集団のもろさ、集団の弱さ、集団分裂の危機がつねにつきまとい、また集団の惰性化、形式化による集団活動の枯渇がつきまとう。集団目標の検討、集団の統制、集団の組織化がたえざる課題として提起され、質の高い集団化がつねに推進されていかねばならない。それが集団の自己深化過程であり、集団づくりの過程である。集団は集団を集団たらしめる必然的契機をもちながらも、内と外につねにこれをつきくす矛盾の契機をもっている。この矛盾を見きわめ、人間が集団としてともに生きる体制を確立し、自発的自治的活動を豊かに進展させていくところに特別教育活動の核心がある。

(2) 主体の底をくぐっての集団の深化過程

集団を軸とし、集団化をおし進めていく過程は、個の自由からの発想だけではなく、個に対して絶えずきびしい集団要求を投げかける。それはしばしば個を窒息させ、個性の自由な発展を抑圧する。この集団からの集団化要求をどう

主体的に受けとめ、集団化要求にどう切りかえしていくかということに、集団の中に生きる主体の試練があり、この主体の試練を通してこそ集団の深化発展がある。集団化されていこうとする自己を、どう主体的につなぎとめていくか、個性的に生きようとする自己をどう集団化していくかという葛藤試練の中をくぐってはじめて集団はその集団化要求を健全に発展させることができる。

既成の集団体制はつねに人間化され、より人間的な集団要求が発掘され、それが発展させられ組織され組織集団へと発展させられねばならないが、それはつねに主体の底をくぐる生活指導の機能によって可能にされる。

(3) 客観認識を通しての集団の深化過程

集団として意志を決定し、集団として行動を起すためには、その集団の意志、集団の行動が歴史的社会的発展に対してどのような意義をもつものであるかを科学的に検討しなければならない。集団自体としての認識力が弱く、集団の方向を誤り、あるいは保守的・反動的となり、あるいは不当な集団暴力ともなる。集団としての客観認識力を高める教育がなされねばならない。集団要求を正しく検討するために、また集団要求を歴史的社会的現実の生活の中に正しく実現していくために集団の客観認識力を高めていかねばならない。集団による認識発展の方法的特質は、集団討議により

(a) 人間的現実の出しあいによる現実の弁証的发展

(b) 各人の経験を出しあい思惟を発展させる客観認識の弁証的发展

にある。この機能を動員して集団それ自身の認識能力を高めなければならない。

3. 客観を軸とする科学化過程

(1) 客観認識の自己深化過程

人間は相対するものを客観として定立し、客観の法則性の認識を発展させる。事実を事実として取扱い、事物現象の特性、その連関、法則を明らかにし系列的な客観認識の体系を築きあげる。それは客観を軸とし、客観の論理に従って、客観の体系的認識を確立していくものであ

って、この働きは教科学習の核心をなすものである。

(2) 主体的要求をふまえた認識の深化過程

客観認識は事実を事実として追求し、事実の特性、連関、法則をそのまま反映させていくものであり、それは厳密に客観の論理に従わねばならない。人間はそこでは純粹な認識主観として客観を正しく反映していかなねばならない。問題は自己を純粹な認識主観として突き進めていく支えとなる主体的自己である。認識の発展が「生き生きとした直観から、抽象的思考をへて実践へ」といわれるのは、客観認識が生き生きとした主体の心情に支えられ、主体の実践課題にこたえていくという正しい位置づけを得てこそその深化発展がとげられることを意味する。教科の学習はつねに、生き生きとした生活感情をほりおこし、日常の実践をたくましくしていく生活指導の機能をふまえていかなければならない。

(3) 集団による認識の深化過程

科学的認識を発展させていくためには質の高い学習集団が形成されねばならない。

そこではひとりひとりの子どもの把握が出しあわれ、触発され、迷いや偏りが洗われ、より客観的な認識活動を展開することを可能にするからである。

そしてこの客観的認識を支える主体の学習意欲も、ともに学ぶ人間の集団の中でより高く燃やされてくる。客観への認識活動をもりたせするためには、たえざる集団づくりがすすめられねばならない。

4. 主体化、集団化、科学化の三軸一体

生活は具体の動きである。具体の動きはしかし、渾沌ではなく、その動きを規定する条理がある。私は生活を動かし、生活を高める基本的核心として主体化と集団化と客観化を考える。この三者は、それぞれ他なくしては存在しない媒介関係におかれているものであるが、生活に切りこみ、生活を高めていくためには

主体を軸とする教育過程

集団を軸とする教育過程

客観を軸とする教育過程

を立て、それぞれの深化追求を通して三軸一体の発展を期していかなばならない。すなわち、客観を軸とする教育過程を核心として正しい意味での「教科」を編成し、集団を軸とする教育過程を軸として正しい意味での「特別教育活動」を編成し、主体を軸とする教育過程を核心として「生活指導」を展開させ、この三者の深化交流を実現させる構造において教育実践をもつとも有効に進めうると考える。

註

- 1) 島根大学論集（教育科学）第10号
- 2) 小学校学習指導要領第3章第2節
- 3) 宮坂哲文「新訂特別教育活動」まえがき
- 4) Edward G. Olsen and Others: "School and Community." Plentice-Hall, Inc, New York, 1947. P. 28.
- 5) 雑誌「生活指導」No.24, P. 18
- 6) 全 No.26, P. 124
- 7) 加藤秀男・平野秋雄「中学生のモラル」P. 96
- 8) 全 P. 58
- 9) 全 P. 60
- 10) 全 P.105
- 11) 全 P.104
- 12) マカレンコ・矢川徳光訳「集団主義と教育」P. 93
- 14) 全 P. 95
- 15) E・フロム、谷口隆之助訳「人間における自由」P. 59
- 16) 大久保道舟編「道元禅師全集」P.259. 260
- 17) 「中学のモラル」P.138
- 18) 全 P.126
- 19) 全 P.192
- 20) 「生活指導」No.22 荒川勇喜「現実認識と教師の自己改造」P. 16
- 21) 「中学生のモラル」P.126

(昭和36年10月22日受理)